中村隆文著『物語 スコットランドの歴史―イギリスのなかにある「誇り高き国」』、二〇二二年五月二九日、中公新書

ク式の教育、それに反対するノックスのプロテスタント的教育理念、プロテスタントを受容はしなかったが弾圧もしなかった女王メアリ・スチュアートの治世、平等主義的な教区主導の教育システム、教育現場における市場原理と教育の質の向上を求めたアダム・スミスなど、さまざまな人たちがそれぞれの信念に基づいて真摯に活動した結果が、国力でいえばイングランドにはるかに及ばないにもかかわらず、そのイングランドを差し置いてヨーロッパでもトップクラスの文化や教養の都となった、ということなのである。

第二節　スコットランド啓蒙思想

イギリスの啓蒙思想

ここではスコットランド啓蒙思想（Scottish Enlightenment）について論じてゆこう。「啓蒙」とは「無知蒙昧（もうまい）な状態が、理性に目覚め真理への扉が開き、道理や分別を知るに至る」という意味である。英語での“enlight”には照らすという意味もあり、光が差すかのように人々が教え導かれるというニュアンスがそこにある。啓示といえば、人間が通常知りえない真理を神が示す、というものであるが、啓蒙は人々が自分自身のもとで、偏見や先入観を乗り越える形で目覚めるというものであり、人間の知性・理性が頼りとなる。

高校までの社会科の教科書では、大陸合理論／イギリス経験論、という分類のもとで近代啓蒙思想が紹介されているものも多い。その分類自体は、演繹（えんえき）的推論を重視するか帰納的推論を重視するか、といった認識論的アプローチの対比としてそれなりの意味はあるだろう。しかし、イギリス経験論自体は（合）理性を否定するものではない。イギリス経験論の根幹にはフランシス・ベーコンやニュートンのような観測・実験重視の姿勢があるが、それは宗教とは別のアプローチ、すなわち、自然の法則を解明したり法や政治の正当性をロジックのもとで証明しようとする手法であり、そうした点で、大陸思想と同様、イギリス思想もまた理性を重視するものである。

とはいえ、社会契約論者のトマス・ホッブズや、同じく社会契約論者でありながら経験主義的な認識論を展開したジョン・ロック、それに功利主義者のジェレミイ・ベンサムや、同じく功利主義者でありながらリベラリストであったJ・S・ミルなど、日本でも有名人である彼らはいずれもイングランド人である。ではスコットランド人はどうだったのだろうか？

スコットランドではイングランドにやや遅れて啓蒙思想が花開いた。イングランドから受けた影響というのは決して小さくないが、スコットランド独自のものがあり、また、逆にスコットランドからイングランドへ影響を与えたものもあれば、アメリカにまで影響が及んだものさえある。

使用フォント イワタ明朝